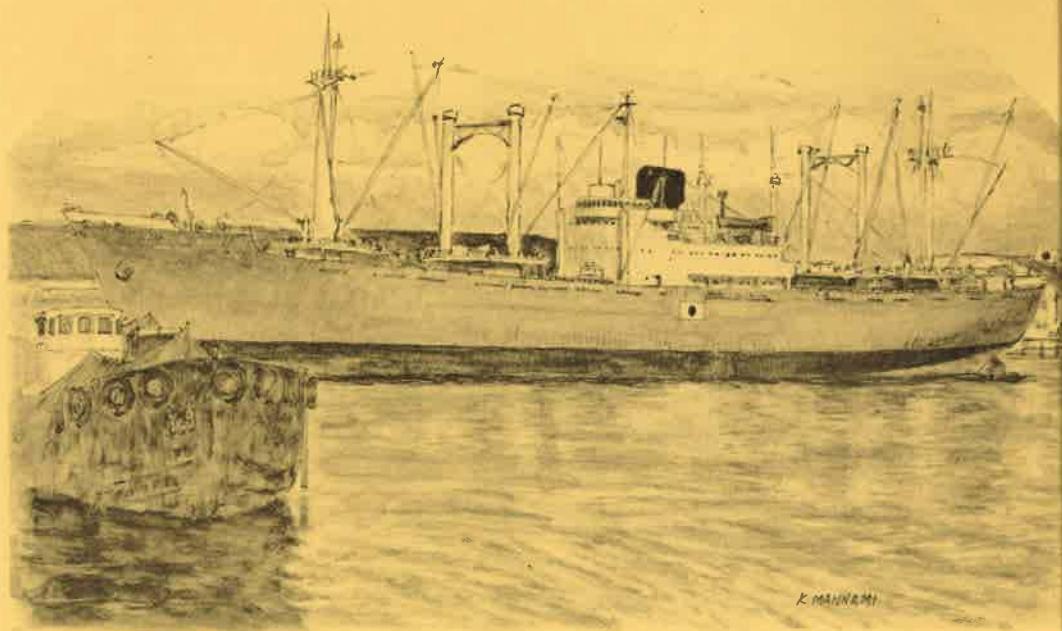


月刊・ブルーアンカー

Blue Anchor



第14号

海文堂書店 1983・3 [14]

〒650 神戸市中央区元町通3—5—10
(電)

| | | |
|----------------------|---------|----|
| 外人墓地に眠る人々 | 谷 口 利 一 | 2 |
| 旅先きで会うこと | 坂 本 哲 男 | 7 |
| 子どもと本――児童館の子どもたち―― | 岡 田 昭 三 | 11 |
| 赤い靴はいてた女の子――博物館見聞記―― | 真 砂 早 苗 | 13 |
| メリケン波止場（下） | 角 本 稔 | 17 |
| ぶっく・えんど | | 24 |
| 海文堂案内板 | | 27 |
| 郷土誌の窓 | | 34 |

目

次

外人墓地に眠る人々

谷口 利一

神戸における外人墓地の歴史は古く、明治以後、神戸と外人との関係はそのまま神戸の歴史と言えるぐらい深いものがあります。

不幸にして日本の土となられましたお方たちの靈を慰める外人墓地は永遠の安息にふさわしい自然の山すそ修法原（再度山）にあります。

一八六七年（慶應三年）十二月二十二日兵庫港開港式に参列するためにきておられたアメリカ水兵さんが急死され、中央区税関に近い小野浜に政府の手で外人墓地が設けられました。

昭和二十六年の講和条約締結記念事業の一つとして昭和二十七年に小野浜外人墓地より二十二ヶ国六百六十五遺体のお方が改葬移転され、昭和三十六年には六十年間神戸市民に親しまれてまいりました春日野外人墓地も使

用しつくしたので移転の運びとなり四十ヶ国一四〇六名のご遺体が移つてまいりました。
昭和二十九年より当墓地で土葬されるようになり四十ヶ国四百五十名の方が土葬されました。明治のはじめ、日本政府に招かれて来日し、近代化のおくれた日本のために貢献して下さいました多くのお方をはじめ、日本最初の鉄道技師、機関車運転士、造幣局の技師、科学者、建築家、教育者、宗教家、神戸港初代の港長のほか、神戸異人館に住んで神戸の歴史を刻んだ多くの人たちが安眠されておられます。

現代ここに眠る遺靈は英国人はじめ五十六ヶ国にのぼります。十字架、胸像、マリア像が見守る石碑はいうまでもなくキリスト教徒の墓。このほか回教徒はじめそれぞの国、色々の宗教（十五宗教）でそれぞれに違った型をしており、そのまゝちょっとした野外彫刻展の感じであります。そのひとつひとつには波乱に富んだ個人の運命と国際的ロマンスが刻まれているはずですが、墓地全体をつつむエキゾチックなふんいきはふしぎに明るくてすばらしい、十一万平方メートルの広大な美しい外

人墓地です。

これら墓石の中で古いのは一八六八年大阪事件で土佐藩士に殺されたフランス水兵十一人の墓です。居留地を語る場合忘れてはならない人物はアレキサンダー・カメリオン・シムさんです。薬の販売元として明治の神戸人に親しまれ、外人の間では義侠の男として知られていました。この人は外人消防隊をつくりその隊長となつたほか、明治二十四年の大地震、同二十九年東北地方の大津波、大阪地方の大洪水などに率先して外人たちから義金を募り、被災者の救助に走り回りました。日本との親善にはとりわけ心を配り、日本でラムネをはじめて売出した人です。シムさんをしのぶ記念碑はいまも東遊園地の片すみにひっそりと建っている。一九〇〇年チフスを患つて死亡され、小野浜地区正面に土葬されて、そこに立派な石碑が建つております。

有名人では神戸港初代の港長をつとめたJ・マーシャ

ルさん。この人は神戸築港を最初に計画された人です。それから二代目の港長をつとめ、海事法の基礎を築かれたマールマンさん。神戸港百年祭には神戸市長さんより

養女加藤きんさんに感謝状が送られました。

文武両道のボーリード・ワインさんは米海軍将校で、明治五年、日本が米国から買った軍艦武器の教育係を務めた後、京都で宮さまに英語を教えられ、また中学校や女学校でも英語の先生をつとめられました。お寺の娘さんと結婚、六十四才で死亡されました。その石碑には文武両道を求める日本人の心にも似てペンと剣を刻み込んであります。

神戸居留地最初の警察署長をつとめられたトロイ・チックさんは居留地が明治三十二年に返還されたのちの警察署（現在の生田署がそれであります）の最初の顧問になられ、明治天皇より勲四等賜わった人です。そのほかに警察署・領事館の巡査をされましたが十二名のお方たちもトロイ・チックさんと同じ場所小野浜地区に土埋されています。

日本ラグビーの創始者、慶應大学教授クラークさん。日本ではじめての製靴技師ハイドケンペルさん。日本最初の機関車運転士ジョン・ムルド・ホールさん。三菱造船技師ミッチャエルさん。教会、英語学校、関西学院をつ

くったランパスさん。神戸女学院をつくったタルカット先生。日立造船創立者ハンターさん。塩屋に外人住宅を開いたジエームスさん。日本最初の英國造幣技師エドワード・ワイオンさん。明治三十七・八年日露大戦後講和条約締結にロシヤ帝国（現ソビエト）を代表して調印されたワスケイチさん。一八六三年（文久二年）伊藤博文公、井上公ほか三名をトロイチックさんと二人で英國船の船長にお願いして密航させた貿易商ロバート・ヒコーズさん。オーストラリア国の神戸最初の商務官サッターサン。日本教育に尽されたサッチャエルさん。ドイツの化学者ウォルフさん。宝塚鉱泉タンサン水の発明者ウイルキンソンさん。NHK放送劇風見鶏でヒロインになりましたフロイント・ドリーブさん、ドイツパン、製菓初代社長夫妻もここに眠られています。昭和四十一年当時約八千萬の遺産をのこし、めぐまれない施設に寄贈されましたサホブケイコさん。重用文化財になり一般公開されておりますライインの館に住んでおられたオバラインさんや最初の持主アルフレッド・ペールさん。米国最初の領事ジョン・G・ウォルシューさん。米国領事で大佐、日

場から墓地の大半をながめられるようにしてあります。敷地内には約數十種類の植木四万数千本が植えられて年中花が咲き、すばらしいお墓を見ることができます。

開いたジエームスさん。日本最初の英國造幣技師エドワード・ワイオンさん。明治三十七・八年日露大戦後講和条約締結にロシヤ帝国（現ソビエト）を代表して調印されたワスケイチさん。一八六三年（文久二年）伊藤博文公、井上公ほか三名をトロイチックさんと二人で英國船の船長にお願いして密航させた貿易商ロバート・ヒコーズさん。オーストラリア国の神戸最初の商務官サッターサン。日本教育に尽されたサッチャエルさん。ドイツの化学者ウォルフさん。宝塚鉱泉タンサン水の発明者ウイルキンソンさん。NHK放送劇風見鶏でヒロインになりましたフロイント・ドリーブさん、ドイツパン、製菓初代社長夫妻もここに眠られています。昭和四十一年当時約八千萬の遺産をのこし、めぐまれない施設に寄贈されましたサホブケイコさん。重用文化財になり一般公開されておりますライインの館に住んでおられたオバラインさんや最初の持主アルフレッド・ペールさん。米国最初の領事ジョン・G・ウォルシューさん。米国領事で大佐、日

をはじめ、船員さんたちの墓も少くはありません。九十人余りが土埋されています。

トルコの宣教師さんで、姫路で柔道大会の試合中事故死されました悲しいお方の墓もあります。

各国の領事館、北野町、布引、青谷、そして須磨、塩屋などにエキゾチックな建物、異人館が沢山外国人の建築家によって建てられましたが、そこに住んでおられたお方達の墓も少くはありません。

しかし、NHK放送劇になりました孔雀の道や風見鶏など、異人館ブルームも手伝だつて墓地を見るために毎日のように遠くからの見学者があり、一般公開を要望する声が強いので、静かなたたずまいと宗教別に整然と並んだ墓碑が港町ならではのエキゾチックなムードをかもし出しているこの外人墓地の一部をこのほど整備して公開しました。正面ゲートから入り、チャペルや第一次大戦で死亡されました十九名の慰靈塔などがある展望台の広

本宮内府顧問・大蔵省顧問をされたデットさん。また、日本人のお方で外国人の妻になられましたお方百五十余人が土埋され悲喜こもごもの人生ドラマがあります。

本名岡本花子さんは大阪の商家の娘でポルトガル貿易商E・A・ダ・キュナさんに見染められ明治十七年世間の冷たい目をふりきつて結婚されました。しかし、幸せは長く続かずわずか三年でキュナさんが急死され、花子さんは再婚のすめを断りづけて生涯を送られました。花子さんの墓は夫の横にぴったり寄りそうように立派な石碑が建てられています。

イギリス船の船長ノーマン・ピアソンさんは神戸で日本の娘さんと結婚されました。結婚七年にして、六才のお子さん奥さまの世話のかいもなく死亡。奥さまは四国の大宝に焼骨を納められましたが、昭和四十七年に外人墓地に石碑を建てられました。昭和五十年の暮も押しつまつた二十八日に不注意からガス事故にあった一家三人も同じ墓地に主人と並んで納められ人の涙をさそいます。

日本の港に上陸後不幸にして急死されました船長さん

とりわけここに埋葬されている人たちのことを思う時、明治の初期にわが国を訪れこの国をなんとか先進国仲間に入れようと必死になつて努力した外国人の方々を思う時、まったく頭の下る思いがします。

肉親や友人の方たちになりかわつて私がお慰めすることはどうともできることではありませんが、精いっぱい墓地を清掃し美しい緑の中で安らかに眠つて下されば」と念じておられる毎日です。

日本はいま経済大国と呼ばれるまでになりましたが、それが良いことなのか、よくわかりませんが、遠く外国人を訪れ、この地に眠る人々の靈をどんな宗教の人だろうとどんな國の人だろうとおなぐさめするのは私の天職だと思ってつとめてまいりました。

遺族のいるいないは別にして、また話が通じなくとも、すべての人々の安住地である自然はすばらしい終点だと思っています。

再度の自然、自然の中の外人墓地を美しく保ち育てる尊さもようやくわかつてまいりました。

私は昭和二十六年十一月、外人墓地の管理人となりま

した。それ以来墓の面倒をみてまいりました。足かけ三十年も世話を続けてきました。

海外から沢山の礼状をいただきました。神戸市長さんははじめ国際委員会より表彰状を、そして各宗教団体からも沢山頂戴しました。来日されました英國王女マーガレット殿下夫妻に招かれ晩さん会の榮を賜わり上京しブライスさんの大邸宅で二晩も泊めていただいた良き思い出のかずかず心の中につめて、昭和五十五年八月末日、私は外人墓地の管理人を退職いたしました。

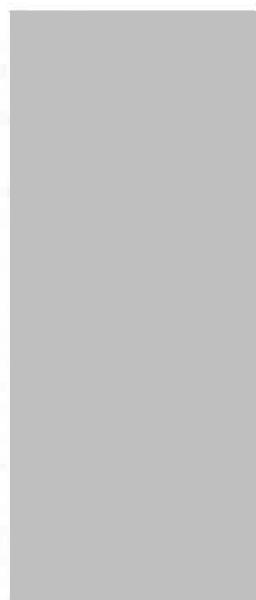
（略）

合掌

（略）

（略）

- 6 -



（略）

（略）

旅先で会うこと

坂本哲男

旅先で、ふと、知人に会うと、なんとなく心がなごむことが多い。それを機縁に、より友情が深まつたりする。逆の場合もあるであろうが…。

海外旅行だと、会うことも稀だから、いっそう、親近

感がわいてくる。わたしが最初に海外旅行に出たのは、昭和36年。その時、知人ではないが、偶然、三人の有名日本人に出会った。そのうちのお二人は、いまは故人であるだけに、よけいに懐旧の念がよみがえる。

一人は、政界の実力者であった河野一郎氏。もう一人は、朝日新聞で「天声人語」を書いていたコラムニストの深代淳郎氏。そして、もう一人は、作家山崎豊子さん。

（○）

パリのオペラ座前の、とある洋装店の前。通りかかって「いや、ありや、ネマキじゃねえのか」と、低いダメ

ミ声の日本語がいきなり飛びこんできた。

と同時に、わたしは、あ、あの声は…。造船疑惑事件の時、時の吉田茂首相にするどく国会で斬りこんだ、まさしく、あの河野一郎氏の声である。

かたわらの秘書らしい青年に、そう言った河野氏は、わたしがそばにいるのに気づいたらしい。急に振り向くと、ニタリ。「やあ」と、ちょっと、手をあげて、この方はヤブニラミなのだが、その顔にまことに柔軟な笑顔が浮んだ。

ところが、その日は五月一日。マロニエの花がきれいなパリの街だった。しかし、メーデー。休むことの好きなフランス人は、いっせいにバカンスをとり、店のほとんどもブラインドを降ろしていた。ホテルにいても仕方ないので、こちらはそんな街でぶらぶらしていたわけだが、この大物政治家河野一郎氏も、それとおんなじにさまよい出てきたのであろうか。人通りのほとんどないパリの街で、ウインド・ショッピングとしゃれながら…。

そして、たまたま目にふれた婦人服に、秘書氏と、あれはイブニング、いや、ネマキと品定めしている。しか

も、ネグリエジエといわずに、ネマキというあたり、ご愛嬌だったが、河野さんは、おしのびの途中、ちょっと、バツの悪そうな笑顔を、偶然、見ず知らずの若い日本人であるわたしにかいま見させてくれたのである。

わたしは、その時から、この柔と剛との両面相を持つた政治家の、その、大衆性、に、すっかり親しみを感じて帰国した。いま生きていらっしゃったら、かの田中角栄とは、はたしてどんな政治的関係にあつたであろうか。そんな思いもして、いつそうなつかしい。

深代さんと出会ったのは、ロンドンの下町の、あまり上等でないバーのカウンターで。しかし、うまいサーモンのいぶしたので一杯やっていると、未知の日本人が静かに入ってきた。

今日のようすに、日本人の海外旅行者がワンサといふと、おたがい会って、「あいつ、どこのノーキョーさんか」などと、知らん顔をすることが多い。だが、三十年代では会うことも稀少価値があつて、最低、目礼ぐらいはし、時間があれば立話などもしたものである。

深代さんは、ちょっと手をあげ、わたしの横にきわめ

決して、日本のインテリに見られる、押しつけがましいところがみじんもなく、実にナチュラルで、そのうえで確固としたバーソナリティが内包されているのがよくわかる人物。時間は短かったが、いい人に会つたな、といまでも深代さんの著作集を読んだりして、親近感をつのらせている。

パリのモンマルトルの、あるカフェ・テラス。そこにぼんやりしていると、向こうから、メガネをかけた小柄な女性が走って来た。

ちょうど、そこが四つ角になつていて、横断歩道。大体、ヨーロッパでは、絶対といってよいほど、歩行者優先であり、赤でも平気で車道を横切る者が多い。だから、わたしは、外国の交叉点などを小走りに渡つてゐる者を見たら、まず、日本人という観念を持っている。それだけに、メガネの女性を見ると、ははあ、この人もまた、と思って、おかしかった。

彼女は、やがてわたしと同じカフェに入り、一人の日本男性を見つけると、その横にぴたり。そのうち、どういうきづかけだったか、会話を交わすようになり、

て自然にすわつた。相当、旅なれた人だな、と思つてみると「こういう者です」と名刺を差し出した。見ると、朝日新聞東京本社編集委員深代淳郎と書いてある。

初対面ではあつたが、ニューヨーク特派員として、健筆をふるつていられたので、名前だけは知つていた。

深代さんは「これから、下町のちょっとややこしい所へ入りこむんですよ」とい、わたしの分もお酒を注文、さりげなく「お代はボクの伝票の方へ」といた。その仕方が実に自然で、こちらも気がゆるみ三十分ばかり大いに会話を楽しんだのである。

帰国してから、深代さんはその時の体験を日曜版にルポルタージュとして書いていられるのを読んで、なつかしみを感じたこと、いうまでもない。

わたしも、これまで、いろんな人にお会いしてきた。それぞれ、個性のある人の印象も残つてゐるが、まず、そのうち、最高のインテリゲンチャはだれだつたかといえば、深代淳郎氏といつてよい。彼の経歴からそういうのではなく、あくまで一個のバーソナルとして、そう信じてゐる。

メガネの女性が、毎日新聞学芸記者で、小説を書きはじめている山崎豊子さんであることを知つた。

「失礼ですが、こちらの方は？」と問うと、彼女は、ちょっととにかく仕草で「同じ新聞社にいるんですけど」と答えた。そして、ずっとあとで、写真をどこかで見て、その時の男性が彼女のご主人であることが判つて、なるほど、なるほど、とうなずいたことをつけ加えておきたい。

○

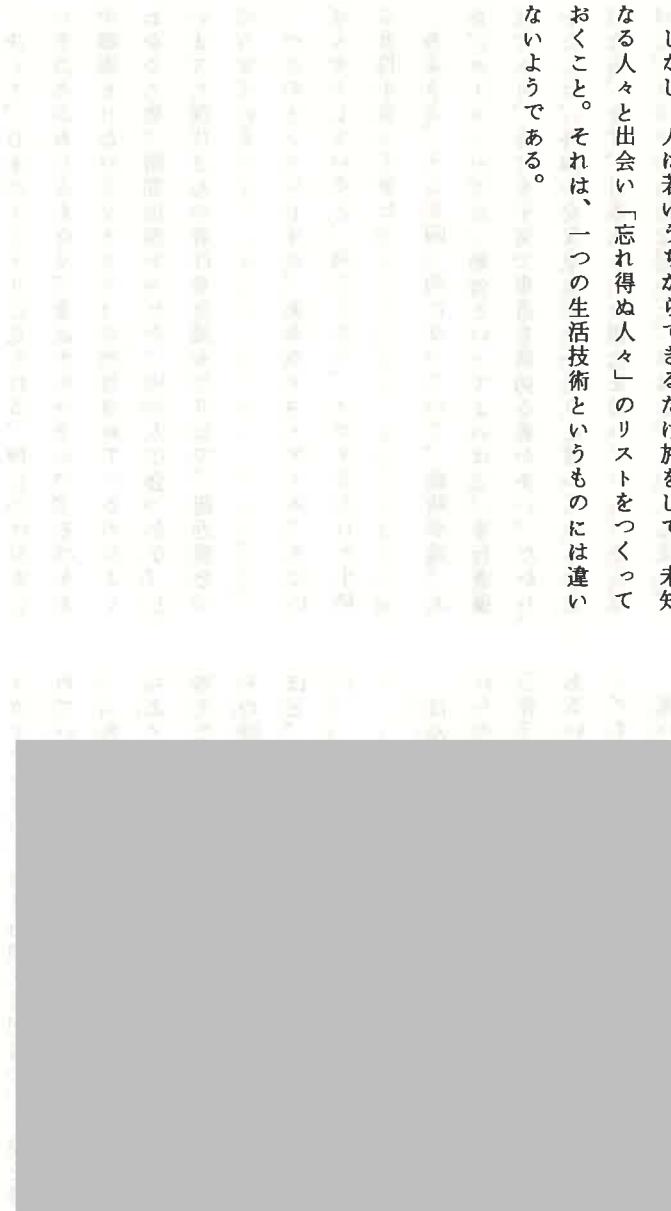
ほんの行きすり、そして、それつきりで、その後、これらの方には国内では一度もお会いしていない。しかし、三者三様、いままでも、深代さんの知性、河野さんの稚氣、あるいは山崎さんの秘密が、時として、記憶の底でハミングするのを覚えるのである。

思い出というものの、どうやら、ソフトとハードと、二つのバターンがあるよう思う。甘いのやら、苦いのやらが、一緒くたになつて、思い出の引き出しのなかに入つてゐる。

ところが、このころは、そのうち、ハードな方はなる

べく忘れて、ソフトな方ばかり引き出し、なつかしむ風がある。するくなつたかもしないし、一種の逃避行、それだけ、オレも年をとったんだな、と思つたりするわけだ。

しかし、人は若いうちからできるだけ旅をして、未知なる人々と出会い「忘れ得ぬ人々」のリストをつくっておくこと。それは、一つの生活技術というものには違いないようである。



子どもと本

——児童館の子どもたち——

岡田昭三

○図書室の風景

二月末の土曜日の午後、広い開発団地のセンターにある児童館の図書室は、南向きの広い窓から日光がさしこんで暖房なしでも結構暖い。寒さにめげず集つてくる子どもたち（殆ど小学生）で一ぱいだ。四〇平方メートル程の部屋の三〇席は満員、二〇人程は床に坐りこみ、壁によりかゝって読書に夢中である。隣室でゲーム遊びの子どもたちの嬌声、騒音も耳に入らず、物語りの世界に入りこんでいる。わたしはゆっくり部屋の中を廻つてみる。やっぱり八割位はマンガの本だ。ニタニタ笑つている男の子、無意識にセーターの袖をいじついている女の子、話しかけでもうわの空の生返事である。しかしその子どもたちの眼の輝きと真剣な表情について微笑んでしまう。

○マンガの是非

この図書室には、日本と世界の様々な文学、小説、童話や百科辞典、図鑑、入門百科、各種文庫本、マンガのシリーズ物と一部雑誌を合せて約一五〇〇冊の児童書が並べてある。市内の児童館ではマンガを置いていない館も少くない。「マンガが無ければまともな本を読んでくれるだろう。」事実これらの館ではそうである。「思いきってマンガを全部撤廃した方が良いに決っている。」いや待てよ、幼い彼（女）たちは「宇宙戦艦大和」で勇気と正義を、「キャンディ、キャンディ」で優しさと思いやりを感じ、「どらえもん」のびのびと共鳴し夢と希望をかなえているのだ。わたしもこの年頃、気が弱くバカ正直で失敗ばかりしている「のらくろ一等兵」に笑いころげながら、眞面目と正直の尊さを無意識に学んだものだ。マンガには忘れ難い懐しさがある。だいいち今の時代の子どもたちは、学校では勉強に追われ、塾で鍛えられ、家では教育熱心な親に叱咤激励されているのではないだろうか。せめて児童館にいる間だけでもテレビに邪魔されず（？）ゆっくり楽しませてやりたい。「ど

うしたものだろう?」昔から決断力の不足なわたしはまた迷い考えこむ。「そうだ、少し時間をかけてマンガの冊数を減らしていく。最後によく選んだ流行のものと古くから人気のあるもの数十冊位にしてしまおう。」心の中で足して二で割った結論をだしてやっと気がおさまる。

○貸しだし図書

昨年四月から図書の貸しだしを始めた。勿論マンガは駄目。(ご家庭の教育ママが怒り猛るだろうから。)こちらで選んだ「母と子の童話」(集英社)五十冊、「子どもの伝記」(ポプラ社)十冊、「民話と伝説」(偕成社)三十冊、「少年探偵・江戸川乱歩集」五十冊に限る。初めはどれ程借りてくれるだろうかと些か不安だったが、この二月末の十一ヵ月で延四百五十四冊、月平均四十一冊が借りだされている。子どもたちの読書欲は旺盛なのである。

可愛い女の子(両親共働きの鍵っ子の一年生)が貸出帳に書いている。「Nちゃんはいつ本を読むの?」「お母さんがいない時やお友達と遊ばないとき」(この子はテレビっ子じゃない。感心かんしん)家族一緒に部屋で

読んでいる子もいる。(兎小屋の悲劇)それでも子どもたちは読んでいる。

○むすび

近くのH小学校の全校生作文集中でひと際目立つすぐれた感覚でわたしたちを驚かせた三年生の女子Hちゃんや、先頃の児童館でのオセロ大会で上級生たちも寄せつけない程の思考力をみせた一年生のKさんも読書家だ。今度本の好きな子どもたちで座談会を開こう。この図書室に音楽を流したらどうだろう、「めだかの兄弟」など、いや読書中ならクラシックがいいかなあ、と次々楽しい想像をする。

現代っ子は本を読もうとしないという人がいるがそうは思えない。本屋さんの児童書コーナーの「立ち読みをしないでください」の張り紙の横で、子どもたちは追いだされるまで本を手にしている。彼(女)たちは読む時間と環境に恵まれていないのだ。大人たちはもっと考えよう。



(本多聞児童館長)

赤い靴はいてた女の子

—博物館見聞記—

真砂早苗

センター街から京町筋をまっすぐ港へ向かって歩いていくと、オリエンタルホテルの南隣に『神戸市立博物館』がある。

現在の建物は昭和十年に横浜正金銀行神戸支店(後に、東京銀行神戸支店)として建築され、戦争をぐりぬけて五十年近く。ギリシャ風建築のエンタシス方式の外観は当時のまま。舗道のガス灯(今はもちろん電気だけれど)が郷愁を誘う。

昨年十一月三日、文化の日にオープンしたばかりとい

うこの博物館は、館内は大理石。一・二階吹き抜けのホールは贅沢に空間を有し、不思議な落ち着きを醸し出している。

昨秋、開館特別展として『海のシルクロード展(11/3~12/20日)』が開催されていた時のことだ。私は買物帰りにたまたま前を通りかかった。両手に荷物を下げてはいたが、ちょっと興味を覚えて軽い気持で立ち寄ってみた。

しかし、展示品はあまりにも豊富で重量感があり、いちいち感心して見て歩いているうちに、私はすっかり胃の腑がもたれたみたいになってしまった。見てまわる要領がわからないまま、ひとつ余さず見ようとするのだから、館内を半分まわっただけで疲労困憊。肝心のシルクロード特別展の方は気力が続かなくて、心を残しながら端折ってしまった。

痛む足腰と空腹を引きずって帰る道ながら、何事にもスタミナ配分が大切だとつくづく思った。

あれからたいして日にちも経っていないのに、私は又、博物館へ行ってみる気になった。「『源平合戦図屏風』を神戸市立博物館で初公開」という一月五日付、朝日新聞神戸版の記事に誘われたのである。

私は兵庫県人（宝塚市）となつて日は浅く、まだ二年

にも満たない。半分外地の住人の眼でこの神戸を眺める
と、いろんなところに平相国の色濃い影を感じ、それが
今もなおいきいきと息づいていることに驚かされる。

神戸史を紐解けば、必ず清盛の名が出て来る。福原に
都を造り、大輪田ノ泊を改修し、経ヶ島を築き——清盛
は港神戸の基礎を築いた恩人なのである。神戸市民の清
盛に対する思い入れも、なるほどと納得できようものだ。

この市立博物館と例外ではなく、正面玄関を入って
案内所のすぐ横、大理石の台座の上に身の丈二メートル
ほどの法体姿の清盛の立像が、広々とした空間に戸惑つ
たようなはにかみを見せて立つており、さらに又、奥の
学習室（神戸に関するビデオディスクが収められており、
自由に自分でリクエストして見ることができる）には坐
像の清盛が、やや着ぶくれて法衣に首を埋めたような格
好で、右手に経巻、左手に数珠を携えている。

彼と彼、作者は違うのだが、眼差しは似通つた感じで、
「神戸に清盛、健在なり！」を眼の当たりに見る思いが
する。

今回の特別展は、南波松太郎氏収集・寄贈による『古
地図の世界（1/15 ~ 2/20日）』である。四千点にのぼる
豊富なコレクションのうちから、日本図・道中図・世界
図と111点が選ばれ展示されている。折角のこれだけの貴
重な収集展示品を前にしながら、門外漢の私には多少猫
に小判。通り一遍の見方しかできないのが残念な気がし
た。

古い昔、中学・高校の日本史で習った伊能忠敬だの司
馬江漢だのが眼の前の地図の作者となつて、にわかに熱
い血が通つていく。記憶の向こうに霞んだ教科書を思
出しながら、それでも私は熱心な見学者だった。

次回の特別展は『神戸の文化財（4/12 ~ 5/29日）』と
銘打つて、神戸市内の寺社にある彫刻、絵画、文書典籍
等、国宝・重要文化財などを展示する由である。

ギャラリーでは『小磯良平展（2/1 ~ 3/13日）』
そしてハイライトは今回の私の目的、『源平合戦図屏
風（2/1 ~ 2/28日）』、一の谷の合戦と屋島合戦と六曲

一双になつており、作者は江戸時代初期の町絵師、狩野
吉信。屏風の随所にたなびいた金雲には梅鉢や亀甲など
の盛上紋様が施され、敦盛の討死や、那須与一の扇的的
射など、お馴染みの場面を繋いでいる。

この日（2/19日）の午後、ミュージアムコンサートと
して、ゆかりの源平屏風の前で『筑前琵琶の調べ——平
家物語』が催された。初めて聴く平家琵琶。一時間足ら
ずの演奏だったけれど気軽に博物館でこういうのを聴け
るのはうれしい。特別展に因んだ粹な催しはこれからも
計画される由。

常設展示室は六つのパートに分れていて、繩文・弥生
時代から現代に至るまでが貴重な資料をもとにわかりや
すく説明されている。

しかし、何と言つても、神戸開港あたりの展示品の面白
さ楽しさは抜群である。港神戸の面目躍如といふところ
だ。紅毛碧眼の異国文化に初めて接した日本人の驚き
と好奇心がさまざまとうかがわれる。

『環海異聞』や『蕃談』（漂流者が外国船に拾われ外

国生活を体験してその風俗や生活を描いたもの）、『開
国絵巻』や当時の辞書類。『ろしやのいろは』というタ
イトルからして、先人たちの努力と苦労が偲ばれる。
かわったところでは望遠鏡。いわゆる『遠目鏡』とい
うやつだ。全長26.5cmという肝を潰すような凄いのがあり、
そうとう重そうだけれどこれでいいたいどうやつて見た
のかしらと興味をそそられる。五つの筒に分れており、
一番外の筒は薄茶の皮張り。内側の四筒は黒地の一閑張
り（和紙に漆を塗ったもの）ともに金色で唐草模様が描
かれている。覗き部分はべつ甲細工。豪華にして優雅。
これが十八世紀初頭、森仁左衛門によつて作られた純国
産品というから驚く。

他にも大小、粹を凝らした美術工芸品とも覺しき遠目
鏡がオンパレードだ。

日本に初めて遠目鏡が入つて来たのはいつ頃だろう。
イギリスから徳川家康に献上されたのが記録として残っ
ている由だが、それより以前、織田信長の頃はどうだろ
う。あの新らしいもの好きの信長公がこれを手にしてい
たら格好のおもちゃだったに違ひない。紅いビロードの

マントなど羽織って、絢爛たる安土城の天主閣から、へやあやあ、城下の民の暮らしや如何に？と眺めていれる図などいかにも似合っている感じで、想像は勝手に広がる。もっとも、信長の眼は城下の民の暮らしより、もつと遠い処を見ていたようにも思うけれど。

ホールのつきあたりに居留地の模型がある。明治三十一年頃の居留地を $\frac{1}{1200}$ に縮尺したものだ。

修好通商条約（1867年）により、初代兵庫県知事伊藤博文が定めた居留地は、フランワーロード（旧生田筋）と鯉川筋にはさまれた西国街道以南の地域であり、1番から126番まで整然と区画されている。

東の端は現在の神戸市役所本庁舎。西の端は大丸百貨店。その道をまっすぐ下ればメリケン波止場だ。

商館、領事館、銀行、ホテル、クラブ……

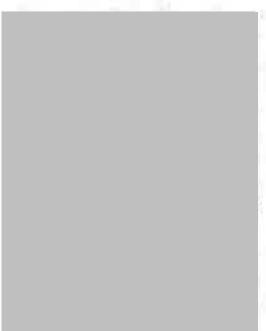
黒瓦に白やレンガの壁。ロマンチックなペランダ。ペンキの色が彩やかな窓。あの道を鹿鳴館スタイルの西洋婦人がフリルのついた絵日傘などさしてそぞろ歩いたのだろうな。かたわらにはシルクハットの紳士が腕を貸しだったのだろう。

いくら眺めても見飽きなく、夢がふくらむような楽しい模様だ。

帰りにメリケン波止場にまわってみた。若い頃よく歩いた横浜のメリケン波止場が思い出される。

波止場のとつづきに、『神戸税関、萬国波止場』と記された門柱が立っている。

久しぶりに嗅ぐ潮の匂い。海面に浮きつ沈みつ白いカモメ。夥しい数のクレーン。繋がれた船。漂ようブイ。波止場特有の喧噪と活気とノスタルジア。赤い靴はいたたの女子は、この港からも遠い異国へ旅立つて行ったのだろう。



メリケン波止場（左手）から右側の海面を埋立てる。
(手前は阪神高速道路)

メリケン波止場（下）

神戸観光汽船船長 角本稔

「ギブミー・コーヒー」メリケン波止場を出航したランチが、和田岬沖に錨を降ろす外国船に着けると、私達若い船員は決まったように「やかん」を持ってタラップを駆け登り、厨房へ行きコックにこう言ったものである。

これは昭和三十年末期で、私が廿才前後の話である。現在ではコーヒー、紅茶もインスタントの良い製品がありランチにも備えているが、当時まだその様な品は普及しておらず、こうして外国船へやかんをさげ、貴いに行つたものだった。

外国から直行で神戸に来ると、和田岬沖の検疫錨地に錨を降ろす。そして神戸検疫所の検疫官がランチで乗り込み、船員が伝染病等に感染していないかを調べる。その間マスト上には万国共通で、黄色の「Q旗（検疫旗）」が掲がり其の他の人は船の周辺で待機する。

そして病人も無く感染の恐れが無いと分ると、Q旗が降ろされる。続いて入国管理事務所の職員が乗船して入国審査を行う。

法務省の入国管理事務所の職員は、密入国者が居ないかを調べ、正規の船員に「ショアーバス」を発行する。

このカードは船員が日本に上陸する際の通行手形のようなもので、税関のゲートを通過する時に提示する大切なカードである。これを所持しないと密入国者と見られ波止場のゲートで上陸は拒否される。

なおこの「ショアーバス」は、彼らが日本を離れる際に全部回収し入管へ返却する。

神戸税関の職員も乗船して所持品リストをチェックする。規定オーバーだと関税をかけるし、酒、たばこについても厳重に調べる。特に覚せい剤やピストル等の持ち込みを阻止しなくてはいけない。船によっては盜賊の出没する危険地帯を航路にするものもあり、護身用にピストルや武器を備えている。しかし日本の港に碇泊中これを持ち出さないように、格納庫に納めて封印をするのである。

みはギリシャ人かイタリヤ人がほとんどであった。に行けばコックも船員も愛想よく迎えて呉れた。二、三ヶ月の長期航海で、久しぶりに見る異国人だから珍しさも手伝ってのことだろう。シケにも会い長い船旅で久しぶりに入港する。上陸して見る女性はとてもチャーミングで美しく見えるそうだ。後に十人並み以下であったと分り、げっそりすると笑っていたが。

船の台所や食堂には彼らのお茶好きを証明するように、お茶のセットが置いてありいつでも飲むように湯も沸いている。無い時にはコックに頼めば「OK」と言って丸い大きな缶からコーヒーの粉や紅茶の葉を出して呉れた。それをやかんに入れ湯をそぎ、砂糖やミルクを加えるのだが砂糖の多さに「その様に甘いのを飲むのか」と眼を丸くして驚いていた。どうやら現在砂糖を控えて飲んでいるコーヒーの三倍程の甘さではなかつただろうか。コーヒーもギリシャ人の飲み方は、普通私達が飲むやり方とは少し違うのである。普通サムズよりも少し小型のカップにコーヒーの粉末を入れ、湯をそそぎ少量の砂糖とミルクを加え（これも人によつては加えないのもあ

よ船会社から代理店業務を委ねられた事務員が乗船して、船のスケジュールや積荷等の事務処理を行い、長い航海の労をねぎらうのである。

現在就航する新鋭船は、衛星通信を利用して、どの洋上からでもテレックスや電話が送受出来るのだが、まだその当時は通信設備は備えていても微細な事務処理は無理であった。だから代理店の事務員が入港事務で乗船すれば事務に手間どり、一時間半～二時間は退船できなかつた。

その間、通船（ランチ）は付近の海上で待機するのだが、風や潮の流れにより船が遠く流されてしまう。そこで船長は「入港連絡」と聞くと、貨物船の舷に下がつてラップを登り、コーヒーか紅茶を入れて貰いに行くのだ。私の行ったのは代理店の関係上ノルウェー、イギリス、リベリア、ギリシャ船が多かつたが、リベリア船の乗組

る）、そのうわ澄みをすするようにして飲むのである。当然コップの底には粉が沈殿しているので、知らぬ人が飲めばその粉までも口にすることとなる。フランスの飲む有名な「カフェオーレ」は先にミルクをたっぷり入れて後でコーヒーの液を加える。またアメリカ人の飲む「アメリカン」はとても薄味と、一口にコーヒーと言つてもその飲み方は国によつて千差万別である。

さてやかんをレンジにかけて沸かすしばしの間、船員達と片言ながら話をするのだが、彼らの質問はやはり「神戸はどんな街か」、「バーはどこにあるか」、「女はどうか、金は幾ら位か」と聞いて来る。そんな話がきっかけで上級船員を三の宮のキャバレー「新世紀」へ案内し、一緒に飲んで同席のホステスに「今晚どないか出来ないか」と頼んだこともあった。店が終つて二人は夜のネオン街に消えて行き、「約束が果せた」と妙な満足感を味わつたが、ビジネスで外国人と付き合う人は商談をスムーズに進めるため、やむなく世話をした経験を持つでは…。

そこで変な体験もした。船の台所や食堂で時間を気に

しながら、コーヒーを沸かすのに無中でいると突然尻がむずむずするのである。ふと気が付いて後を振り返えると中の船員がにたにたしながらしきりに私の尻を撫でいる。何事か分らないのできょとんとしていると、次には手を延ばし私の下腹部をまさぐりに来た。ここでようやく「ホモだ！」と気付き、やかんを持ってタラップを駆け降りた。

このような話は外国船に仕事で乗船する人々の間にはよく言われている。書類にサインを貰うために船室へ入った青年が、鍵をかけられて追い回わされる。船に寄ばれ船内を案内されたのち酒を飲まされ襲われる。夜間荷役作業で船に泊り込んだ場合も危い。また欧米人から

「君の英語はブローケン（荒い）だから教えてやろう」と近寄られる。以上のように外国船へ行けば実に様ざまな機会に同性愛の対象となる危険性がある。軍隊や刑務所でも行われるケースが多いと聞くが、閉鎖的な男性のみの社会では力関係で、青少年が性欲のはけ口として女性の代役にされ易いのであろう。もつとも歴史的にも古代ギリシャやローマでは公然と男同志の同性愛が行われ、

それがまた権力の象徴とも見られていたようである。十字軍や教会の修道僧にもあつたらしく、ヨーロッパ旅行の際にローマ、ボンペイ、パリのルーブル美術館の展示物でも、それらしき感じのする作品を見たのである。外国船の乗組員も全部男性とは限らず、ソ連や北欧のスウェーデン、ノルウェーの各国は女性船員も乗り組んでいる。スチワーデスの仕事をするそうだが、長期の船海でその船内の男女関係や秩序はどのように保たれているのか興味が湧くことではある。

外来文化といえば語弊があろうが、一時「ベトキン」なる言葉が港でよく聞かれた。これを文字に表わせば「ベト菌」と書くのが適當ではなかろうか。つまりベトコンに似せて「ベトナム」と「性病菌」の合成語で、当時はしきりにささやかれとても恐れられたのである。特に港ではよく知られた言葉であった。

南ベトナムでアメリカとゴ・ディン・ジエム独裁政権に対する武装闘争（ゲリラ）が始まつたのが一九五九年六十年（昭和三十四年～三十五年）である。南ベトナム解放民族戦線との戦いは次第にエスカレートをし、社

会主義の南下を阻止するべくアメリカは特殊戦争から局地戦争へ移つた。その頃アメリカは兵士二十万人を派遣していたのである。一九六四年（昭和三十九年）にアメリカ第七艦隊の駆逐艦が北ベトナム魚雷艇の攻撃を受け、トンキン湾を砲撃し続いて北爆。アメリカはベトナムにおいて抜き差しならない泥沼へとはまり込んで行き、一九六九年（昭和四十四年）六月には実にアメリカ軍五十四万人、衛星国の中隊約七万人がベトナム現地へ入ったのである。一九七五年（昭和五十年）四月北ベトナムのホ・チ・ミン作戦で南のサイゴンが陥落（解放とも言う）し南北統一した。つまり南も社会主義一色に染まり南ベトナム政権やそれを支援したアメリカは完全に敗北を見たのである。

この間神戸港からも沢山の貨物が送られ、急速にコンテナ化したのである。出入りするコンテナ専用船のコンテナの中身は、アメリカや日本からの軍需物資や兵器の一部品が一部積まれているとの噂がしきりに流れた。箱の中身は見えなく、それを扱う関係者や船員にもその中身は余り知らされなかつたのである。また六甲山頂に据え

られた米軍専用のマイクロウェーブ中継アンテナがベトナム戦争當時大いに活躍したそうである。

この戦争のため沢山のアメリカ兵がベトナムへ派遣され、現地の女性に肉体的快楽を求めた（現在彼らの残した沢山のベトナム孤児が問題になつてゐる程である）。兵士は戦争状態で不衛生な多数の現地女性と関係し、性病や風土病に感染されて日本の基地へ一時引揚げて来る。そして知つてか知らずか、その周辺の遊興地や外人バーで遊びその女性と肉体関係を持つ。そして彼らを相手にした娼婦やバーの女は一ヶ所にとどまらず全国を転々とする。しかし外人兵士相手だと職場が限られて、自然と行く場所が沖縄や内地の基地か、もしくは外国船員の遊ぶ港町である。

ベトナム戦争の盛んな昭和三十年代の末から四十年代末の約十年間に、奇妙な名の病気が港の人々の間でささやかれしかも恐れられたのである。

病気の発生源はベトナムあたりで、感染ルートはアメリカ兵と日本女性と日本男性。あるいはインドシナで遊んだ日本船員と日本女性。

それは性病である。しかし日本のテキストに載つてゐる淋病や梅毒其の他の分類には見られない症状であつて、治療にあたつた専門の医師でも完治するのがとても難しく、その原因に首をかしげるのであつた。

しかし詳しく述べている者は少なく、私も現実に病氣に感染した人を見たことは無い。だが人々は医師が首をかしげる性病を「ベト菌」に原因があるとして、外地から輸入した特別の病氣と思い込んだ。

外人バーの女が客の送迎でメリケン波止場に姿を見せたが、肌に少しでも噴き出物が見られれば港の男は「ベト菌持ちだ」として避けて通つたものだ。

私も当時は甲板員で船で寝起きをしていたので、彼女達とよく顔を合わせる縁から知り合いとなり会話をした。多分面白半分だろうと思うが「やらしたげる」と若い私を誘惑することもあった。しかし人々が語る「ベト菌」を耳にしていたので「あとが大変だ」と、とてもその様な気になれず、真夜中の波止場を逃げ回ったのを覚えている。

若いその女が果して変な病氣にかかっていたかどうか

声も余り聞こえない。まるで歴史的なこの波止場の終末を見る思いである。

昭和六十二年に完成する「メリケンパーク」に、人々と港を繋ぐ接点として、港のゆとりの場所として大いに期待を抱く。メリケン波止場は消えても、廿一世紀の神戸港のあるべき姿を示している気がしてならない。

おわり

(参考文献、現代用語の基礎知識、'83ベトナム項)

知らないが、あとで考えると眞面目に日本人を好きにならうとしていたかも知れないと考えるのである。外人を相手とする女は彼らの慰安や性欲の対象として働き、日本女性の性の防波堤としての役目も果したのではあるまいかと、その身の哀しさを思うのである。

最近南京町や三の宮に見る外人バーは、かなりの店が外人専門から日本人を入れるスナックと化し、その当時はかなり内容が違つて来たように思われる。そして外國船員も物価の高い神戸では余り遊ばなくなつた。反面日本の「バブ」でもある元町や高架付近の酒屋へ入り、原酒の酒を気軽に飲む光景がしばしば見られる。彼らの性欲の対象は安い東南アジアで求めていたらしい。神戸に来る船も定期航路や合理化で碇泊日数が少くなり昔のようにのんびりとはしておれないのであろう。

かつて港を代表したメリケン波止場も、沖に碇泊する船も極端に少ない今では、波止場を往来する船員の姿もまばらで、それに伴い人間の生きざまを見せた人々の影も消えた。港めぐりの発着場も中突堤。通船乗りは配置転換や転職を迫まられスタンバイを告げるスピーカーの

ぶつく・えんど

高校の世界史の教科書で、紙の発明はへ紀元一〇五年に後漢の蔡倫が発明したと教わってきたが、どうももつと前からあつたのは確からしい。一月三日の神戸新聞に「中国に世界最古の紙」と題して詳しい記事がでているので紹介することにしよう。

中国で最も権威のある学術誌「文物」に数度にわたり、中国科学院自然科学史研究所の潘吉星副教授の研究論文が掲載されたが、同論文によると、この世界最古の紙は、発掘現場の地名にちなんで「灞橋紙」「金闕紙」「中顏紙」などと呼ばれている。

灞橋紙は一九五七年、陝西省西安市の郊外にある墓の中から、前漢の武帝（紀元前一四〇—八七年）の時代に鋳造された半両銭と一緒に発見された。この紙はクリーム色で、一緒に出てきた銅鏡の下に折り重ねた状態で敷いてあり、半両銭と同時代のものと鑑定された。発見当初は綿らしい、とされていたが、一九六四年に詳しい成

分分析をした結果「麻などの植物纖維でできた本物の紙」とわかった、という。

金闕紙は一九七三年、中国西北部の甘粛省で、前漢の軍事歩哨所だった金闕遺跡から発掘された。白色で二一×一九センチとほぼ正方形。一緒に出てきた木簡に記された年号から判断して、少くとも紀元前五二年以前の紙と鑑定された。

中顏紙は一九七八年、陝西省内の遺跡から見つかった。つぼの中に丸めて何枚も押し込んであり、最大のものは六・六×七・二センチの麻紙だった。このつぼは前漢の宣帝（紀元前七三—四九年）の時代のものと鑑定され、麻紙は宣帝の前後の時代に作られたと断定された。

実際に、蔡倫から一〇〇年以上の開きがあるわけで、紙の歴史も書きかえる必要がある。この「文物」の論文を入手された町田誠之京都工織大名誉教授はこの二月にP H P 研究所から「和紙と日本人の二千年」（五〇〇円）という本を出しておられる。

* * *

文庫本の絶版をここ十数年蒐集しているという岩男淳

一郎さんのエスコートで辿る絶版文庫本名作の旅「絶版文庫発掘ノート」なる本が発行された。本の虫には気になる内容の本だ。

本書に掲載された名著名作は、今や見ることもできな、改造文庫、創元文庫、アテネ文庫、世界文庫、世界古典文庫から、岩波文庫、親潮文庫、角川文庫など十八文庫の八十余点。紹介されている文庫本は一冊一冊作品の解説がついていて楽しく読めるし、現在の古書価や入手しやすいかどうかも書かれていて探書案内の役割も果している。ここ数日、眠り薬に読んでいるが、なかなか面白い。本の好きな方におすすめします。発行は青弓社で発売は創林社。定価は一四〇〇円。（「出版ニュース」二月下旬号）

* * *

るにご注文下さい。

工学書関係以外のジャンル別目録としては、理学書・人文書・歴史書・経済経営書・法律書・ヤングアダルト・家政学・社会福祉・児童書などの目録が刊行されています。どの目録もインフォメーションコーナーに最新版をそろえていますので、ご覧になりたい方はお申しつけください。

* * *

「雑季帖」という雑誌が昨年六月に創刊され、現在までに三号刊行されている。見る機会がなかったのでどんな雑誌なのか知らないが、これからは地方小出版流通センター扱いで全国販売することになったという。発行所はリトルバインで、所在地は二六一五 京都市右京区西院

三号

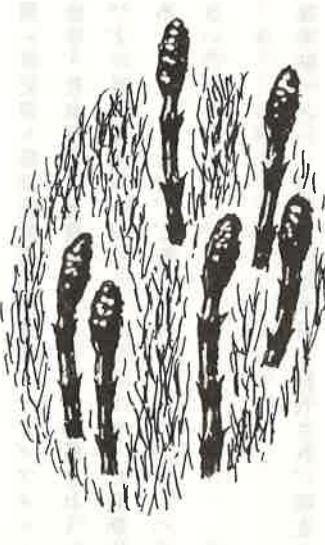
毎年二月になると、工学書関係の分野別図書目録が刊行される。今年も建築・土木・電気電子・情報工学・機械・化学などの目録が発行され、利用されるお客様のために一階と二階で備えています。特定のジャンルで、本を探される人には便利な目録です。ご入用の階はお気軽

までは京阪神のローカル誌としてやってきたが、これからは文化現象（とくに出版文化）を深くオモシロク取り上げていく予定という。四号は三月下旬の発売で、特集は「小さいメディアは必要だ」。特集名だけ案内が出ているのでついでに紹介すると、五号が、読者はどこにい

るのかな？——八〇年代読書空間を求めて——、そして、六号は、エディターシップ考——現代雑誌論——、と統いている。どんな雑誌に育っていくか注目していく。念のため、急いでつけ加えると、海文堂では四号を三冊注文しております。運が良ければ店頭でご覧いただけると思います。

* * *

東京出版販売から最近『OAブックガイド』という目録が刊行されました。コンピュータ関係のソフトを中心とした書籍と雑誌のブックリストです。最近のOAブームを反映してこの分野の出版物は実に多種多様ですが、それらを整理してまとめたものです。内容はハードウェア／ソフトウェア／アプリケーション／OA関係雑誌／マイコンソフト／ページ／と分類して収録されており、その多彩な出版物には時代の花形を思わせるものがあります。一階 インフォメーションと二階レジに用意しておりますのでご希望の方は声をかけてください。



郷土誌の窓

神戸史談会の会誌「神戸史談」をお預りして販売することになった。大正十五年創刊の由緒ある雑誌を店頭で見ていただくことができるようになって、自分のことのようになると嬉しい。当誌九号に「昔の港・今の港」をご寄稿いただいた西川光一さんがお届けくださいました。へ二五一号／へ二五二号／の目次を紹介することにしよう。へ二五一号／については、前にこの欄で紹介したが、その時は、総目録のことにつか触れず論文名が欠落していた。

へ二五一号／（昭和五七年十月）

○神田兵右衛門胤保翁を偲んで 神田 三郎

○義経と一の谷への路(二) 下田 勉

○新新・神戸の外人居留地 山下 尚志

○銅鐸文化園と海人族 中谷 一正

○「旧西代の字名幸」 平野 和美

○桜守・笹部新太郎翁 若林 泰

○村上華岳さんこと 荒尾 親成

○神戸史談会誌総目録

（へ二五一号／（昭和五八年一月）

○播磨出土の法隆寺系複弁八葉蓮花文鏡瓦

島田 清

○義経と一の谷への路(三) 下田 勉

○神戸付近の古建築 中谷 一正

○辛亥革命と神戸 陳 德仁

○南蛮美術 忙中忙談 池長 孟

○兵庫むかしあれこれ

一、兵庫南浜の明治末期頃の子供の遊び

..... 神田禎次郎

二、民謡の流れ 神田禎次郎

三、「民謡の流れ」を読んで 西川 光一

○資料 馬場村芝家文書 松村 義臣

* * *

保育社の「カラーブックス」といえば、写真を中心としたビジネスアルな文庫として長く親しまれているシリーズだ。このシリーズの中には『神戸異人館』や『神戸歴

史散策』『神戸の味』『神戸の味どころ』など神戸にテーマをとったものがいくつある。このカラーブックスの最新刊が『神戸電鉄』(五〇〇円)だ。新開地から鈴蘭台を経て有馬へ、三田へ、栗生へと伸びる線路と風景、列車を写真で紹介している。神戸電鉄は、かつては、神有電鉄の名で親しまれたが、沿線の住宅開発が進むにつれて、利用する人たちが増え、輸送力の増強も急ピッチで進んでいる。昭和五十四年には、神戸電鉄、阪急電鉄、神戸財界によって北神急行電鉄が設立され、この会社が経営する北神線は、布引駅から六甲山をトンネルで北上、神戸電鉄有馬線谷上駅へと至る。これによって、現在開発の進む神戸市北部と都心部が最短距離で結ばれることになる。

* * *

家の光協会から『一粒の麦は死すとも』という本が発行された。著者は新日本文学会会員の薄井清さんで、神戸にゆかりのある賀川豊彦の生涯を描いた伝記小説だ。

明治二十一年七月十日、兵庫県神戸区湊川での出生から昭和三十五年四月二十三日の死に至るまで、賀川豊彦の

三十年の思い出と歩み』が二百枚、それに写真、資料をはりつけたアルバムが十三冊。項目を拾うと「日本海軍最初の教育者・米将校ボルドウインとその家族」「日本ラグビー創始者・慶應大教授クラーク」「日本で初めての製靴技師ハイドケンベル」「日本最初の機関車運転士ジョン・ムルド・ホール」「ソ連秘密調査機関長の父ボリス・チエフ」「三菱造船の英人技師ミッチャエル」など興味をひくタイトルがズラリと並んでいる。神戸の文化史を語る上でも貴重なこの本は、現在、東京の出版社で出版計画が進行しているということだから、間もなく書店の店頭に並ぶことだろう。人間ドラマの発掘にかけた谷口さんの生き方は実にさわやかだ。

* * *

神戸の第五管区海上保安本部に勤務している海上保安官井上豊さんが、保安官の体験を素材にして書いた長編小説『海の特捜Gメン—子捨て小舟』(千四百円)が成山堂書店から発行された。麻薬密輸事件を背景にした小説で、親子の情愛を描いたもの。井上さんには前に『海の特捜Gメン—霧笛の詩』があり、今回の本が二

生き生きとした活動を描いている。豊彦を知らない世代に、彼の流した人間に向けられた涙と汗とを、この本は豊かな筆力で伝えてくれる。定価一三〇〇円。

* * *

神戸の修法ヶ原の外国人墓地の管理人を三十年勤めた谷口利一さんが、埋葬者の供養にと身元調べを続けておられたが、このほど調査の全容をまとめ、出版の運びとなつたことが一月五日の神戸新聞に出ている。同新聞の記事によると、谷口さんは昭和二十六年から外国人墓地の管理人となつたが「管理人は墓守りをしているだけでは供養に欠ける」と、同墓地に葬られた五十六カ国二千四百五十人の一人ひとりについて生前のことをはじめ、いつ、どこで、何によって死亡したかを調べ始めた。参拝する人から埋葬者とのつながりや思い出、遺族の消息をたずね、分かった人には手紙を出して確認した。その結果、全埋葬者のリストと、身元の判明した人の生前のありよう、エピソードなどをつづった記録が野紙にぎつしり五百六十枚、四百字詰め原稿用紙にすると千二百枚になるという。今度新たに書き下ろした「外人墓地管理

作目。共に当店にて販売中。

* * *

『ひょうごの野の書』なる本が刊行された。その名通り、兵庫県内に散在する書跡を拾いあつめ、解説を付したものだ。道しるべ、詩碑、墓誌銘、記念碑といろいろある。個人では、正岡子規、安藤聖空、富田碎花、湯川秀樹、草野心平、武者小路実篤、三木露風、柳田國男、与謝野鉄幹、寿岳文章、新村出、吉川英治、川田順、徳富蘇峰、返本遼、高浜虚子、頬山陽、佐藤春夫、柳宗悦、司馬遼太郎、荻原井泉水、孫文、河東碧梧桐、八木重吉、勝海舟、田捨女、島崎藤村、吉井勇、良寛、鬼貫などの碑が収集され、おもしろい。A5判、二四六ページの本で、見開きの右に解説文を、左に拓本や写真が入っている。著者は名筆研究会主宰の村上翔雲さん。発行は神戸新聞出版センター。定価は二三〇〇円。

* * *

神戸文学学校の卒業生たちや教師たちでつくっている風車の会の会誌「風車」(四号)をいただいた。隨筆・詩・エッセイ・小説・童話がぎっしりと詰まっている、

人間エキスの缶詰のようだ。創刊号の頃、この会誌を読ませていただいたので、二〇〇ページもの部厚いこの作品集には、時の流れと、人の流れを感じずにはいられない。この号には、文学学校のおこなってきた校外行事の記録もまとめられていて、それ自体が校史にもなっている。同誌へのお問い合わせは、

神戸市中央区下山手通二丁目一三一—一一一
福成ビル

神戸文学学校風車の会

(電)

までお願いします。価値は一五〇〇円。

* * *

慶応四年（明治元年）に発生した神戸事件を明治外交の出発点としてとらえた本が刊行され、注目を浴びている。

明治元年正月十一日、岡山備前藩の隊士の行列が三宮神社前を通過するとき、神戸沖に停泊中の外國軍艦の乗組員数名が行列を横切ったことに端を発し、砲火も交える衝突となつたこの事件の展開と背景、その影響を明治

期の外交との関係で論述したもので、新しい視角から神戸事件に迫っている。この書は内山正熊さんの著で中公新書の新刊『神戸事件——明治外交の出発点——』（四四〇円）。

一月二十一日付の神戸新聞に兵庫県警の科学捜査研究所が設立二十周年を迎えて記念誌を発刊する記事が出ている。記事によると、現在、編集が進められているのは「科学捜査研究所二十周年記念誌」で、沿革、現況紹介、主要鑑定事例など七章二十項目から成り、B5判で約百ページ。写真をふんだんに使った読みやすい内容で、編集も八割がた終わり、五月をメドに発行する予定だ。

生活に密着した民俗資料を集めて展示している、神戸市東灘区深江本町三、深江大日神社境内にある「神戸深江会館生活資料室」が約三千万円をかけて現在の五倍にスペースを広げ、今年八月ごろオープンすることになった。一月二十九日付の読売新聞によると、史料室は五十六年に、深江財産区管理会が村史づくりを計画した際に、

基礎資料として地域の各家庭に残されていた生活用品を提供してもらい、約千点を整理、展示するために開設されたもの。その後も地域の消防団や婦人会、個人からの提供品が増え続け、今では収蔵品は二千点になった。計画によると、増築部分は鉄筋コンクリート三階建て、延べ面積約二百三十平方メートル。一階に百年前の暮らしを再現した展示室、二階に民具展示室と神戸商船大学保存の和船の道具類や航海図などを借りて展示する海事資料室、三階に医事資料室と小ホールを作る計画。

* * *

・地蔵尊三十四基、その他供養塔など八基がある。松本さんはこれらを四年半かけて根気よく調べ、克明な記録を財団法人住吉学園から出版した。落合さんの発言で、この中の石仏の一基が南北朝期のものと推定され、石造美術史に一ページを加えることになった。

* * *

神戸市灘区に在住の仏教美術館の老研究家が二十年間にわたって全国の仏足跡を調査した成果を一冊の本にまとめた、という記事が二月六日付の読売新聞に出ている。記事によると、この人は灘区赤坂通森さんで、本は『仏足跡をたずねる』（八〇〇〇円）。

仏足跡というのは釈迦の足跡をかたどった彫刻や絵画で、石に彫ったものを仏足石というが、これらの歴史を系統的にまとめ、現存する仏足跡をほとんど紹介したのがこの本だ。同書は、前・後編に分かれ、前編は仏足跡の発生から日本伝来までの歴史と解説、後編で各地の仏足跡の紹介をしている。

* * *

二月一日の神戸新聞に、神戸市内最古の石仏が神戸史学会代表の落合重信さんによって確認されたという記事が出ているので紹介しよう。記事によると、昨年の暮れ、松本行雄さんがまとめた『荒神山無縁墓地の由来』に收められている石仏のうち、南北朝時代（一三三六年—一三九二）とみられる一基が、出版を祝う会の席上落合重信さんによって明らかにされた、という。荒神山（神戸市東灘区住吉台町一・二丁目）南面の傾斜地にある無縁の墓石は総数千百八十二基。ほかに五輪塔三十八基、石仏

神戸市都市整備公社が、六甲山のイメージアップをね

らって初めてのガイドブックを発行した。一月二十八日の神戸新聞の記事によると、ガイドブックはイラスト風の地図を添え、観光施設など六甲山の楽しみ方を案内したもので、山を開いたイギリス人グループや日本で最初の六甲山ゴルフ場など歴史や山にまつわる伝説もつづっている、という。三〇〇〇部を印刷して市内の旅館・ホテル・旅行案内所に配布して活用を図っている。お問い合わせは同公社（電話 [REDACTED]）までお願いします。

* * *

二月五日の神戸新聞に学童疎開の思い出が自費出版されたという記事が出ている。自費出版したのは神戸・六甲国民学校（現六甲小）から岡山県笠岡へ学童疎開した教師や教え子たちで、当時の思い出などをつづったその本は『暁霜記』（集団疎開の記録）という。出版したのは、神戸市垂水区歌敷山 [REDACTED]、澤 [REDACTED]さんと級友十九人、それに恩師の土井 [REDACTED]さん。澤さんは六甲国民学校の五年生だった十九年九月、女子児童二十九人と土井先生、寮母さんの三十一人が笠岡市へ

疎開。その当時の級友から澤さんに送られてきた手紙が二百通をこえ、会員のカンパもあって、昨年の暮れ、三百部を出版した。本は「疎開生活」と「再会」の二部構成で九十三ページ。お問い合わせは澤さん（電話 [REDACTED]）まで。

* * *

神戸市が発行している『市政白書八三年版』（九〇〇円）が二月下旬に届いた。この白書は別名『花時計からの報告』ともいっているが、市民生活の現状を知るために資料が豊富に収録され、参考になる。行政から市民に向けたレポートだ。今回は『ポートピア'81を振り返って』という特集記事も組まれ、五三〇頁もの大冊となっている。最初に入荷した分は好評で売り切れとなつたが、先日第二便が到着した。郷土コーナーに展示していますのでご覧ください。

* * *

「歴史と神戸」の新しい号、通巻一一六号が入荷した。巻頭の文には「二十二年目に入りました」とある。目次を紹介することにします。

○神戸の歴史——昭和前期編（終）

[REDACTED]

落合重信・陸井敏子

○神戸外国人居留地 [REDACTED] 山田 郁子

○保安処分の源流——大正時代の入江三郎

事件を中心に—— 加藤 博史

○摂津禪昌寺華屋宗嚴の講学について 片岡 秀樹

今号の四十七ページには朝鮮関係の図書約二万点を収蔵している須磨区の青丘文庫が落合さんの手で紹介されている。文の中に、青丘文庫では八年『青丘文庫図書目録』（価格三五〇〇円）および「追補」（同五〇〇円）が発行されていることが出ている。また、利用にあたっては、来館前に一度連絡されたいとのこと、できれば文庫関係者の紹介がほしいということだ。貸し出しはしないが、コピーは一枚十二円の安価サービスをしている。

青丘文庫の所在地は

神戸市須磨区千歳町 [REDACTED]

海文堂案内版

六月下旬 「カメラ・エンサイクロペディア」

七月上旬 「留学をあなたに」

七月下旬 「恐怖の本・大集合」

八月上旬 「メール・ランド」

八月下旬 「地球の生きものたち」

九月上旬 「コピーと広告のあるくらし」

目まぐるしいブックフェアになりそうですが、どの

フェアも精一杯心をこめて取り組むつもりです。どうぞご期待ください。

★ 春はどこから来るのか。多分、童謡の歌詞にあるよう、あの山こえて野をこえて、遠い空からやつてくるのだろう。海を毎日見ていると、海は空の色を映している、もう一人の空のような気がする。その海の色が三月に入つて明るくなってきた。冬の退却が目に見えてきた。四月。季節が脱皮をはじめた。

★ 前号でお報せしましたが、一階東入口前のブックプラザでは四月からテーマごとのブックフェアを次々と開催してまいります。九月上旬までのフェア計画がこのほど決定しましたので、ここにご案内いたします。タイトルは一部変更すると思いますがご容赦ください。

四月上旬 「作家を旅する」

四月下旬 「スプリング・コミックス」

五月上旬 「歴代政治家ブックフェア」

五月下旬 「TIME・TEMPLE」

六月上旬 「混沌の時代に生きぬく法」

★ 二階ギャラリーでは、四月一日から六日まで「陶芸・絵画二人展」を開催します。元ブラのついでに、ちよっと立ち寄ってご覧ください。そのあと、七日から二十四日までは「ヨーロッパ版画プリントセール」を予定しています。お気に入りのリトグラフに出会えるかも。そして、四月二十五日から五月三日までは「フランス・スペイン新作絵画展」を計画。準備をすすめています。

★ 一階の人文書コーナーでは、社会学、民俗学の棚の小さい平台を利用してミニフェアを実施していくこと

になりました。三月いっぱいは「松下幸之助フェア」をくり広げていますが、四月からNHKで第Ⅱ期のシリクロードの番組が始まるのに合わせて、シリクロードの関係書をあつめたブックフェアを計画しています。四月末日まで開催する予定です。五月に入りますと、大阪書籍が刊行している「朝日カルチャーブックス」のシリーズを紹介をかねて展示いたします。

また、日本歴史の棚では「特選歴史書フェア」を開催しています。歴史書のスペースをすこし広げましたので、歴史に興味のある方はお立ち寄りください。

★ 文庫ゾーンでは、早川文庫の「海洋小説フェア」と、社会思想社の「春一番」、教養身につく教養文庫フェアを同時に開催します。期間は三月十五日から四月十五日までの予定です。

★ 新書ゾーンでは、小説の配列方法を従来の出版社別の配列から、作家の五十音順配列に並べかえました。また、岩波新書や文庫クセジュなどのあつた棚を外国文学の全集の棚に入れかえました。

